
夜の歩き方

藁部 御門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の歩き方

【Nコード】

N0917X

【作者名】

藁部 御門

【あらすじ】

ある日突然見ず知らずの狂人に襲われた犬神いぬがみしろや白夜は人間としての死と引き換えに人狼の力を手に入れた。

そんな力を持て余し、戸惑う彼に一人の少女と出会う。

彼女は人間では無いといい、この世界の危険と生き方を犬神に説明する。

「さあ、夜の世界へようこそ！」

宴の痕（あと）（前書き）

まだ、完成してない作品ですけど、
何となく頑張っ行ってこうと思います。

汚い駄文ですが、よろしくお願いします。

宴の痕（あと）

夜空を見上げる、明日にも満月になろうという月は丸々と輝き、星は空を所狭しと輝いている。そんな夜に男と女が肩を並べて歩いている。女は月明かりでもしつかりと輝いて見えるほどの美しい髪を持ち、きりつとした目に、小さな口、整った鼻立ちといった顔のパーツが計算されたように並べ、十人が十人ほど美人と答える美女だった。男の方は、ダボダボの制服をだらしなく着用し、ボサボサの髪をしており、男女共に地元の進学校の制服を着ていた。きつと、普段ならその二人を第三者が見ればあまり釣り合っていない高校生カップルに見えるだろう、だが今の状態を見ればきつと、怪訝な顔をして通報されるであろう。

和歌や俳句でも作られそうな美しい夜に、きつと物語のヒロインであるう美女は電信柱に向かって胃の中身をリバーズしていた。

「うええええつ。気持ちわる」

彼女は美しい顔をぐしゃぐしゃに崩して、真っ青な顔をしていた。

男はあきれた顔をしながら、彼女の背中をさすっていた。

「飲み過ぎなんだよ。お酒飲んだ事も無いのに、あんなハイペースで飲んでたらつぶれるに決まってるだろ」

「だって、酎ハイ飲んでたら気分がよくなってきて、それにみんながどんどんお酒をすすめてくるから」

男はため息をつきながら、彼女を見つめる。他の同級生が彼女に酒をすすめた理由が、彼女を酔わせて彼女の痴態が見たいからだと言ったら彼女はどんな反応をするだろう。きつと「そんな卑屈な事を考えるのは白夜くんだけだよ」といって彼らの肩を持つのだろうか。そんな事を考えながら、彼女が落ち着くのを待つ。

全て吐き出して落ち着いてきた彼女の肩を再び持って、男と女は再び帰路につく。

「今日はありがとう、そんでごめんね」

彼女の言葉を聞きながらどうしてこんな事になったのかを思い返す。

男の名前は犬神いぬがみしろ白夜、高校三年生で帰宅部歴三年目だった。そして本日は文化祭だった。本来進学校の三年生が文化祭などに力を注ぐことなど無いのだが、今年は犬神の隣で酔っ払っている女、神宮じんぐう綾芽あやめが、学校生活最後に面白い思い出を作りたいと言い出し、学校中の男たちが一斉にやる気になり、かつてないほどの熱気に包まれた文化祭になった。なにがすごいかというと、わざわざたこ焼きとお好み焼きを作るためだけに、関西に修行に行った奴がいたり、ただの金魚すくいじゃ面白くないからと人面魚をわざわざ手に入れにいったり。文化祭の宣伝のために選挙に使う車を借りて、他県まで宣伝に行ったり、ステージの部のために人気アーティストを呼んだりと、男たちは学園のヒロインに対して全力で媚びを売った。まあ結局誰にもはなびかなかったわけだが。

そういった男たちの報われない行動のため、文化祭は大盛況のまま幕を閉じた。そして当然のごとおこなわれる打ち上げ会に犬神と綾芽は参加したのだが、普段優等生で通っている綾芽は飲み過ぎてふらふらになったのでほぼ強引に犬神が宴会から連れ出して送る事にして今に至っている。

「まあ、別にいいけど」

犬神は綾芽に肩を貸しながら歩いて行く。彼は綾芽に対し肩を貸して歩いてはいるが、彼は決して綾芽の彼氏というわけではない。家が近所の幼馴染という奴である。まあ物語によくありがちなパターンである。

「だけど、白夜クンを強引に打ち上げに誘って良かった。一人じゃ帰れないところだったよ」

酔っ払いながらこちらを向いて話かけてくる綾芽に向かい犬神は笑いながら答える。

「まあ俺がいなくても、紳士の皮をかぶった狼たちが、綾芽を送り届けてくれるさ」

「そしたら、明日から私のあだ名が『ゲロ女』になってるよ」

その言葉を聞いて、犬神は、俺が綾芽を送って良かったと心から思った。なんせ学校の奴らの綾芽の崇め方は異常である。清く正しく美しいそれが学校のヒロインである綾芽へのイメージである。それを真つ向から否定する（たとえば目の前でゲロを吐く）なんて事をすればそいつに一生残るトラウマを与えかねない。やっぱりいつの時代のアイドルもうんこはしないものなのだ。そいつらの幻想を守ってやっただけでも犬神はいい仕事をしたと思った。

犬神は綾芽とずっと一緒に育った。幼少の頃は二人で悪戯ばかりして、近所の悪ガキの筆頭だった。小学校の頃は二人して、暴れまわり、小六の時には、近所の中学生に対して大人が仲裁に入るほどの大喧嘩を起こした。中学生になり、綾芽は犬神と一緒に悪戯や喧嘩などを起こすことは無くなったが、相も変わらず女とは思えないほど活発で犬神と一緒に遊んでいた。犬神は最初のうちこそ喧嘩ばかりしていたが、半年もするとおとなしくなり、大きな事件も起こさなくなった。二人の関係が少しずつ変わり始めたのは高校に入ってからだった。今まで男のように活発に暴れまわっていた、少女は弓道を始め急におとなしくなった、いやおとなしくなったというより女の子らしくなった。そして彼女の過去を知らない周りの人間たちは彼女を学園のアイドルとして持ち上げ、今に至っている。幸い彼女の過去を知っているのは、学校では犬神ただ一人だった。高校になって彼女とはあまり遊ばなくなり、また周りの目が怖くてあまり声をかけれなくなったため、彼女の素が出ることはめつたに無くなり、犬神自身も彼女の事を周りに話さなかったため、彼女は今日までずっとヒロインでありアイドルだった。

「今日は楽しかった？」

もうすぐ彼女の家が見えてくる所まで来ると、綾芽は犬神に対して尋ねた。

「そりゃ楽しかったよ、どうしてそんなこと聞くんだった？」

犬神は若干ひねくれながら答える。どうせそんな事を聞くといい

ことは彼女の悪い癖が出ているに違いない。

「だって、今回の文化祭にしたって、今夜の打ち上げもかなり強引に参加さしたし」

少し声が小さくなりながら犬神に答えていく、酔いのせいか、若干泣いているようでもある。

「バーカ。そりゃ面倒臭いと思っただけで、楽しく無けりゃ最後まで付き合わないよ。それにみんな打ち上げの時みんな笑ってたろ、楽しいから笑うんだよ。楽しくなきゃみんな愚痴しかいわねーよ。綾芽はいろいろと気を回し過ぎなんだよ」

彼女は頷き、下を向きながら、無理やり笑ったようなほほえみを浮かべている。

彼女は弓道部の主将になってから、いろいろと気を回すことばかりしている、綾芽はもっと肩の力を抜いたほうがいいと犬神は考えていた。

「綾芽は楽しかったのか？」

「そりゃ、楽しかったよ」

うつむいていた顔を急いで上げて犬神に答える。

「だったらみんなだいたい楽しいさ、それに今回の祭りの主役は綾芽だろ、主役がそんな顔されたら最後の最後で失敗って言われちゃうぜ」

犬神の言葉を聞いた綾芽は笑顔を浮かべながら、「わかった」と頷いた。そして家の前に到着すると一人で立って、犬神に向かって話かける。

「今日は本当にありがとう。明日からもよろしくね」

「了解」

そう言って答えると、彼女は家の中に入って行った。そして彼女の母親のどなり声が家の外まで響いてきた。彼女の母親の厳しさを知っている犬神はご愁傷様と思いつつ、ほんの少ししか離れていない自分の家へと向かった。

犬神は空を見上げる、まんまとした月を見て、明日ぐらいが満

月かなと考える。空には無数の星がある、しかし、彼の目に真つ先に飛び込むのは月である。月の美しさの前には、全てが引き立て役にしか見えなかった。一日一日変化していく様も犬神は大すきだった。常に変化し、変わらない物など無いということを示しているように思えた。変化の中で新月となり月が姿を見せなくなったときも、月の偉大さ、月の美しさを再認識するすばらしいスパイスだと思えた。太陽が周りをかき消しながら目立っているとすれば、月以外の物を自らの引き立て役にしながら輝く、そういった所も月に惹かれる理由だった。

月を見上げていると、一瞬影が月を横切った。

「えっ」

驚きもう一度月周辺を見上げる。一瞬ではあったが人型の何かを月を横切ったように見えたのだ。だが見直してみても何も映っていない。いつもと変わらぬ月だった。

「そのキミ少しいいかな」

犬神は空を見上げながらさっきの影に不思議に思っていると不意に肩に手が置かれた。そして、彼の経験で日付が変わろうとするこんな時間に、学生服を着た人間に話かける人種を一人しか知らなかった。

やばいおまわりさんだ。彼はそう思っただけで体を固くした。なんせ現在彼は補導されるための条件が揃いまくっている。深夜徘徊、未成年飲酒、まあ普段ならおとなしくおまわりさんの言うことを聞くのだからだけけれども、今日はいやだった。犬神が捕まれば、学校に連絡が行き、クラス全員が怒られること必至である。最後の最後でそれは避けたい犬神は、肩に置かれた手を払って逃げようとした。だが、逃げようとしても足が前に動かなかった。

「えっ」

犬神が驚いて声をあげ、後ろを振り返ると案の定そこには、警官が立っていた。再度逃げようとしたが体がピクリとも動かない。

「逃げようとししないで、おとなしくしてください」

警官は犬神に向かって話かける。やさしくやさしく。犬神はどうやっても動かない体に恐怖を感じながら、警官に頷いた。犬神は逃げるのをあきらめたのではなく、逃げるタイミングをつかもうと考えていた。しかし、体が動かないため、どうしようも無くなっていた。

「あーあ、えーと、まずいくつか質問させてもらおうよ」

警官はポケットから手帳を抜き出し、ペンを持って彼に話掛ける。犬神はどうか警官の方向に向き直る事はできたが、相変わらず足は動かない。生まれてからこんな事を一度も経験したことのない彼にとつて、言い表しがたい恐怖が彼を包んでいた。

「キミは高校生かな」

犬神は尋ねられてもまともに答える気が無かった。体が動くようになるまで時間を稼ぎたかつたし、第一自分の学校の事を知られるのは良くない。幸い男子の制服は他の学校ともかなり似ているためうまくすればごまかせるとも思っていた。

「うーん、シャキシャキとこたえてくれないといけないな、お願いだから。私も面倒だからね」

犬神は警官の面倒という言葉に反応した。これはうまくいけば誤魔化せる。そう思つて犬神は口を開いた。

「はい、高校生です。近くの工業高校です」

犬神は自分の通っている学校と全く別の場所を答えた。彼は勤務を面倒臭つてる相手なら詳しくは聞いてこないと思つたのだ。

「了解、高校生つと」

しかし警官は、メモ帳に高校名を書き込んだ様子はなく、高校生という部分だけを手帳にチェックしたようだった。犬神がおかしいなと思つた時、次の質問が飛んできた。

「キミ今日アルコール摂ったかい」

犬神は高速で首を横に振つて「飲んでません」と否定した。まあこのことについて否定をしない高校生はきつといないだろう。

「嘘はよくないな、僕は鼻が聞くからわかるよ、キミがお酒をのん

だ帰りだつて事ぐらい。本当は汗を舐めて嘘か本当か判断してもいいけど、キミがいやがるだろ」

警官は犬神に向かつてくだらない嘘をつくなど軽く睨んできた。犬神もさつきから続く金縛りと相まって警官の睨みが非常に恐ろしく感じられた。

「今さつきお酒を飲んでました」

犬神は正直に答えた。ほぼ無意識に答えてしまった。恐怖がだんだん膨らみ始めている。

「OK、飲酒つと」

メモ帳にまたチエックを入れている。そして犬神に向かつて、からみつくような嫌な笑いを浮かべながら、口を開く。

「最後の質問だ、正直にそして正確に答えてね。今日二十四時間以上起きてる？」

犬神はぼかんとした、警官が聞くような事では到底無かった。確かに犬神は昨日の夜から文化祭の準備のために徹夜で作業したため二十四時間以上起きてはいた、だが警官がそんなことを知ってどうするのか？ 最近の警官は市民の健康状態もチエックするのだろうか？ 疑問が膨らみながら犬神は考えた。

「うーん、思い出したかな、これが最後の質問でこれを答えてもらえたら解放するからちゃんと答えてね」

警官は笑いながらこちらの返答を待っている、犬神は自分を包んでいる空気に耐えられなくなって、解放してほしさに答えた。

「昨日からずっと徹夜で寝てません。もう帰っていいですか？」

犬神が答えると警官は、笑い始めた。真夜中なのに人目も周りの迷惑も省みず、大声で、盛大に、狂気と狂喜を交えながら。

「あははっはははっははははははははははは、グッド、エクセレント、マーベラス、最高だね、うん、最高のモルモットだ、やっぱり私は運がいい、やはり月の輝く夜には幸運が降って来るね。あははっはははびやびややはあひやあ」

警官とは思えない狂った笑い声、というより人間かどうか怪し

い。目の前の狂った笑い声を繰り返すものに犬神は、恐怖が危機へと変わったのを感じ急いで、振り返って逃げだした。さっきまでピクリとも動かなかった足は、さっきの金縛りが嘘のように軽快に動き始める。自分が走れていることに、安堵しながらとりあえず警官から離れようと、犬神は行き先も何も考えずに走った。

「あーあ、逃げちゃった。いけないな、どうも集中力が切れると能力も切れちゃうな、もう少し練習しないと……」

警官は彼を追いかけようとはしなかった。ただ、腰にぶら下げた拳銃を取り出して、ゆつくりと、必死に走る犬神の背中、いや、体の中にある心臓に狙いをつけていく。その拳銃は普通の警察官の持っているものとは違った。まず第一に大きい、犬神は気づかなかつたが、日本の警察に許可されている銃と比べふた回りほどは大きかった。次に弾が特殊な形をしていた。カプセルのように二つの部品を組み合わせたような形状だった。そして、その銃が心臓という狙いと重なった時、銃声が響いた。

空気を引き裂く轟音が響いたとき、犬神の体に銃弾を撃ち込まれた、犬神は自分に弾が当たった事より、銃声が響いた事に驚いた、そして、振り向くなと頭が命令しているのを無視して、警官の方へ、振り向く。警官は相変わらず気味の悪い笑顔を向けながらこちらに拳銃を向けていた。撃たれたのか！？ そんな事を頭で考え始めた時ようやく痛みが体から伝わってきた。

「痛っっ！」

小さく呻きながら自分の胸のあたりの痛みが体を支配し始める。すぐに犬神は痛みを耐え切れず倒れこんだ。その光景を確認した後、ゆつくりと警官がこちらに近づいてくる。犬神はなおも必死で逃げようと体を這わせながら移動しようとするが、大した距離も稼げなかった。

「うーん。どうやら無事に心臓に当たったみたいだね。銃弾も貫通してないし完璧だね」

警官のセリフに絶望的な気分になった。

「心臓！、俺は死ぬのかよ」

どんなフィクションでも心臓を撃ち抜かれたらまず助からない、現実ならなおさらだ。犬神は徐々に意識が薄らいでいくのを感じた。「あはははっは、逆だよ。心臓だから死なないんだよ。それに僕はキミを殺す気なんてこれっぽちもないよ」

笑って手でこのサインを作りながら楽しそうに話かけてくる。明らかに狂人のそれである。テンションはハイ、闇夜に笑い声が響きわたっている。

「それに僕はいったよ質問に答えてくれたら、解放すると」

「解放！？ どこがだよ、完全に殺しにきてるじゃねーか、畜生、それとも介抱でもしてくれるってのか！」

「違う違う、僕は君たち人間の窮屈な世界から解放さしてあげるって言ってるのさ。人間の世界からの解放、つまり、生まれ変わりさ、さあ次に目を覚ました時キミの世界は変わっているよ。そして最高に楽しもう。キミは「新しい世界」というより「見え方の変わった世界」で好きに行動してくれ、一ヶ月後に経過を見にくるよ。それでは良い夢を」

そういつて警官は、今度はとてつもなく小さな銃で犬神を撃った。撃たれた犬神は何かを言いたそうに口をパクパクさせながら意識を失った。

「明日はちょうど満月だな」

警官はそう呟いて、夜空を見上げた。

「もうすぐ会えるといいね、かぐや姫。ひやはあああびやはああはははあっあっはあ」

そして、真夜中に銃声が響いたというのに誰も様子を見に来ない明らかな異常な状態の中、男は再び狂ったように笑いながらたった今自らが撃った少年を担ぎその場を去った。

日常とのズレ

「ぎゃああああ」

犬神は絶叫しベッドから起き上がった。

悪夢からの目覚めは得てして救いではある。ただ、彼の場合は新しい災厄を同時に引き寄せた。

「お兄ちゃんキモイ」

悪夢から目覚め、恐怖から戻ってきた、犬神白夜を迎えたのは、妹の罵倒とやたら威力のあるグーパンチだった。

「いたたた」

鼻の頭をジャストミートされ苦しく呻いた犬神は、周りを見渡した。そして自分が部屋のベッドで寝ていたこと、妹が朝起こしに来たことを確認した。そしてそれと同時に昨日の夜の事を思い出す。自らの幼馴染を家まで送り届け、その帰りにおかしな警官に出会ってそれで……。

犬神は自分が拳銃で撃たれた事を思い出し、背中を手で探る。何の傷も痛みも感じなかった。だが昨日の出来事が夢とは犬神には思えなかった。あの、死を覚悟させるような恐怖が今もハッキリと思い出せた。とりあえず、気のすむまで確認を取ろうとした犬神は妹に背中を向けて服を脱いだ。

「マイシスター。俺の背中に傷みたいなものない？」

妹から何の反応も帰ってはこなかった。犬神は妹の方に振り返ると妹は顔を真っ赤にして、こぶしを握りしめ、おおよそ妹が兄に向けるような眼ではなく、汚らしい害虫を見るような眼でこちらをみて、

「死ね！変態いいいいいい」

と振り向いた兄の顔面がくぼむほど素晴らしい右ストレートを叩きこんだ。そして犬神はベッドへと再び眠りについた。二度寝は蜜の味というけれど、本日の二度寝は血の味がする二度寝だった。

「何寝てるのよ」

「ぐはっ」

眠りにつこうとした犬神は、すぐさま妹に腹をニーキックされた。おはようからお休みまで面倒を見てくれる妹に、なんとも言えないかわいさを感じながら目覚めた。先ほどの悪夢からの目覚めと違って、今度は気持ちのよい目覚めではあった。多少体が痛いけれど……

「お兄ちゃん、朝だよ。ご飯できてるから、早く食べよう」

妹に催促され、体を起こすそして落ち着いて全身を見て見ると服装は昨日のまま、それに家に帰った記憶はない。あるのは、警官に体を撃たれた記憶だけ、けどそれはどうやら夢のようである。ならどうやってここで寝ていたのか？

「マイシスター。俺って昨日ちゃんと帰ってきた？」

「いや、家の前で倒れてたよ、チャイムならして玄関でぶっ倒れてたよ。もう、いくらお酒飲んでるからってあそこまでたどり着いたらなら部屋まで頑張つてよ、私ここまで運ぶの大変だったんだから」

妹の健気な行動に感動しながら、もう一度記憶をたどる、家の前までたどり着いた記憶はない。ちなみに犬神は、今まで何回も酒を飲んだが酒を飲んで記憶が飛んだ事はない。

「ありがとう、マイシスターお前はいつだってやさしいな」

「キモイよお兄ちゃん」

そして今度は妹の蹴りをこめかみにもらった。ぐらりと犬神の視界がぐらつく。

「あれ、俺感動して泣いてるのかな、お前の姿が、歪んで見えてきたぜ」

馬鹿なセリフを言いながら、犬神は自分の部屋から出て行った。そしてリビングに向かう途中に自分の服をもう一度見るとどこにも穴など無く増してや血の痕すらない。どうやら完全に夢の中にいたらしい。ようやく昨日の出来事に納得のいく決着をし、妹の作った朝食にかぶりついた。

「うまいよ、マイシスター。最高だ」

犬神は自らの妹が作った朝食を褒めて褒めてほめちぎった。

「お兄ちゃん、毎朝同じこと言ってる、ボキャブラリー増やそうよ」
妹はうんざりした顔をして、兄を見つめる。兄は妹を喜ばそうと、新しい褒め言葉を考える。

「このベーコンエッグは味の宝石箱やー」

これを言ったとたん兄妹の中にさむーい北風が駆け抜けた。

「ゴメン。お兄ちゃんに何かを望むことが間違ってた」

朝一から犬神は妹を失望させたようである。犬神自身もかなり落ち込んでいた。怒涛の勢いで食べていた朝食が、さっきの一言から全然減らなくなった。そこまで妹をがっかりさせたことがショックだったらしい。

「あとそれとお兄ちゃん昨日みたいにあんまり遅く帰ってきたらだめだよ。お父さんもお母さんもないからって遊んでばっかだとなくな大人にならないよ。それにお兄ちゃん今年受験でしょ勉強しなくちゃだめだよ」

犬神家の両親は一年前から外国へ仕事に行っている。ちょうど犬神が卒業するころには帰って来るらしいが、今のところ両親は外国から一度も帰って来ることもなく、兄妹で協力しながら暮らしている。もともと妹は両親と一緒に外国に行く予定だったが、妹が日本がいいと駄々をこねたため、一人暮らしの夢は破れて、二人で過ごしている。

最初は妹がいない方が何かと好き放題できると思っていたが、今では妹がいてとても感謝している。妹は家事を素晴らしい手際で行なっていていき、親がいた時となんだ変わらない生活を兄に供給してくれていた。当然兄も手伝いはするが、いかんせん手伝うと妹にうざがられるため、力仕事以外はすべて妹に任せるようになった。

「わかってるよ。もう文化祭も終わったし、これからは勉強に専念するよ」

妹は頷くと、一足先にご飯を食べ終わり食器を流しにつけると自分の部屋に学校へ行く準備をしにいった。犬神も朝食を食べ終わる

とさつとシャワーをあびて、着替えて家を出発した。家を出る頃にはどうやら妹はもう学校に向かっていたらしい。

「暑いな」

九月の終わりという時期ではあった。だが、十分にお日様は仕事をしており、残暑が厳しい日々が続いていた。風のない日だと汗が止まらないなんてこともざらだった。犬神は暑さにうんざりしながら学校までの道を歩いて行く。校舎の中まで入ってしまったえば冷房が体を冷やしてくれる。それまでの我慢なのだが、暑いのが苦手な犬神にとっては十分すぎる拷問だった。

「おはよう」

後ろから聞きなれた声が聞こえてくる。犬神が後ろを見ると幼馴染の綾芽が涼しい顔をしながら歩いていた。綾芽が部活をしている時は朝練のため一緒に登校することはなかったが部活が終了してからは、たまに一緒に登校することがある。

「お前は暑くないの？ 俺は太陽が憎くなるほどしんどいんだけど、全身からだるそうなオーラをだしながら、隣を歩く美少女に話かける。まあ、周りから見ればどう見ても釣り合っていない。冴えない男と美女のコンビ、どうしてあの二人が一緒に歩いているんだ？ と疑惑の目で見られている。目立つのが嫌いな犬神はやや歩く速度を速めた。

「まあ私は暑いのは平気だから。寒いのは苦手だけど」

「俺と反対だな。冬は全然大丈夫だけど夏はつらいね」

綾芽は犬神と話をしながら歩いて行く、一方犬神は一步一步進むたびに汗をかいていた。

「みんな元気に登校してくるかな、みんなかなり飲んでたから案外ヤバいかもね」

「大丈夫じゃね。なんだかんだで一番飲んだのは綾芽だし。それにしてもあちいい」

「そればっかりだね。もうちょっとで学校だからがんばって」

「がんばってる人間に『がんばって』は禁句だからな。頑張っても

どうにもならないんだよ」

犬神が汗を滝のように流しながら、歩いていくとようやく学校へと続く最後の坂道へとたどり着いた。ちなみにこの坂道はかなりきつい角度の坂で自転車通学の生徒もこの坂では自転車を押して上っている。

「今日こそこの坂を制覇してやる。いくぜ」

たまに自転車部でもない奴が最後まで漕いで行こうとしているが、犬神が見た結果は全て同じだった。

「今日も失敗だあああ！」

途中まで坂を漕いで行くのだがそこから全く進まなくなり逆走して坂の下にあるゴミ置き場に盛大に突っ込んで行く。ちなみに過去に一度だけでもう少しでゴールだった所を見たこともあるのだが、目の前で風が吹いて女子生徒のパンチラをみて鼻血を出しながら落ちて行ったこともあった。その時の彼の一言は「もう少しでゴールだと思っただら視界が真っ白になった」だった。きっと彼がゴールする日は遠いであろう。

教室につくとすでに冷房が効いており、犬神は至福の表情を浮かべながら自分の席にもたれかかった。

「生き返るぜ」

犬神は自分の机の中にいつもも入れっぱなしの勉強道具を取り出し、下敷きで自分を煽ぎながら辺りを見渡した。みんなどうやら休むことなく登校しているようだった。ただ顔を見ると全員疲れ切った顔色をしており、どうやら昨日の宴会の疲れが抜けていないようだった。

「やっぱりみんな疲れてるね」

隣の席の綾芽が犬神に向かって話かける。犬神は若干苦笑いを浮かべながら答える。

「昨日一番飲んでた奴がピンピンしてるのにみんな情けないな」
ただクラスの間は酒を飲んだ後、カラオケに行っているから、その疲れもあるのかもしれなかった。そして昨日の事を考えて、大事なことを思い出す。

「なあ、綾芽。俺って昨日綾芽を家までちゃんと送ってるよな」

「何その変な質問？ちゃんと家まで送ってもらったと思うけど」

「俺その時大分酔ってた？」

「ううん。私と比べて、意識は大分しっかりしてたと思うけど」

「だよな。うん。やっぱりあれは夢じゃないのか？」

「ねえ。何の話してるの？」

綾芽は犬神を何やら心配そうな目で見つめながら、犬神に向かって詳細を聞こうとする。

「いや、別に大したことじゃないんだ」

けれども犬神は何でもないという風に、話を切ろうとした。だが、綾芽は引き下がらない。

「何の話なのか、ちゃんと答えてよ。気になるじゃん」

犬神はしまったと思った。綾芽が興味を持った事は真相まで辿りつかないとあきらめない。

「昨日あのあと何かあったの？」

「何も無いと思う、だけど何かあったのかもしれない、だけど、普通に考えるとやっぱり何も無いね」

「なに、そのすごく優柔不断なセリフ！ギャルゲの主人公の共通ルートの時のヒロインに対する反応みたい」

何となくすごく不名誉なのか、うらやましいのかわかりかねる例えられ方をされていた。いやそれより。

「っていうか、お前ギャルゲーすんの！？」

幼馴染の見てはいけくない趣味を覗いた気分になり、犬神と綾芽の間に、かなり気まずい空気が流れた。数秒二人が空気と共に固まったあと、大きく綾芽が咳払いをして再び話始める。

「まあ、白夜クンの知っている事を全部教えてもらうから」

どうやら綾芽のギャルゲープレイヤー疑惑は追及してはいけ
ないらしい。

「まあいいけど、きつと信じられないと思うな」

「いいから話さない」

どうやら早く話を進めていかないといけないらしい。そのため、
犬神は昨日綾芽と別れたあと、変な警官に会って、妙な質問を受け、
そして、警官の拳銃で撃たれて、目が覚めると自分の部屋で、妹の
話では家の玄関の前で倒れていたという、普通に考えれば酔って変
な夢を見ていた。だけで片がつく事を綾芽に話した。案の定彼女も
「悪い夢でも見たんじゃない」といつて、話を全て聞くに興味を無
くしてしまった。犬神自身も疑問は解消こそしなかったが、無理や
り納得することにした。

そうしているうちに授業が始まった。犬神の通う学校は進学校当
然授業はそれなりにレベルは高く、キチンと受けなければやってい
けない。まあ、犬神は成績はいつもギリギリでテスト前に綾芽にテ
ストに出そうな部分を教えてもらいながらやってきているため、彼
自身は、もはや受験のための授業になっている今の時期の授業はも
うどうでもよくはなっていた。

犬神は進学する気はあまりなかった、というより進学できる頭を
持っていないかった。無論学校を選ばなければ、入れそうなところは
あるのだが、名前のない三流私立に行くぐらいなら就職した方がま
しだと思っていた。なので、推薦で地元の国立大学に落ちれば、親
が紹介してくれる会社に就職することになっていた。

今の授業は数学のセンター試験の過去問のプリントを授業中に解
けというものだった。ただ犬神にはさっぱり分からなかった。とい
うか問題の意味すらつかめない。第一、数学なんて名前が付いてい
るのに、最近じゃアルファベットを使う事の方が多いじゃないかと
くだらない事を思いながら、とりあえず回答欄に、2を書いて埋め
ていった。今までの統計学上2が答えになる確率が一番高いのであ
った。今日は何点になるかなと数学を冒読するような解き方をし、

クラスで一番に問題を解くと犬神はそのまま眠りについた。

本日の授業は生徒の弱点把握のためのセンター過去問を解かすがほとんどだったため、犬神は得意な教科はすばやく終らせて寝て、苦手な教科は諦めて寝るということを繰り返した。

現在の時刻は昼休みである。本日は木曜日、両親が共に外国に行っているため、犬神に昼休みに食べる弁当はどこにも無い。そのため、毎日購買でパンを買って食べるという行動を繰り返していたのだが、親が外国に行ってから半年を過ぎたころから幼馴染が毎日木曜日だけお弁当を作ってくれているのである。

犬神はそのことに大変感謝していた。決して、学園のヒロインである綾芽の料理が食べれることを喜んでいるのではなく、作られた弁当が大変おいしいから喜んでるわけでもなかった（味でいえば妹の料理の方が十倍おいしい）。犬神が喜んでいたのは弁当の量である。綾芽は毎回木曜日に犬神に向けて用意する弁当は重箱五段である。内訳は一段目丸ごとご飯、二段目サラダ、三段目揚げ物系、四段目魚料理、五段目肉と野菜の炒め物。毎回多少の変化はあるが、たいていこれだけのものを用意してくれている。

そして、この中身はほぼ全て犬神一人のためだけに作られている。綾芽は綾芽で小さめの弁当に普通程度の量の弁当を自分用に持っており、現在重箱は犬神の机の上に広げられ、綾芽の弁当は彼女の膝の上に乗っていた。

「サンキュー綾芽。じゃあ早即、いただきます。」

そう言っただけで犬神は所狭しと自分の机の上に並べられた弁当に箸をつけた。

「よくかんで、ゆっくり食べてね」

綾芽も犬神の顔を見ながら自分の弁当を口に運んでいった。犬神は彼女のセリフを無視して、掻き込むように弁当に喰らいついた。

初めて弁当を綾芽が用意したときは弁当はこれほど豪華なもので

は無かった。もともと、犬神が「購買のパンに飽きたから妹に弁当作ってって言ったなら、何で中学生の私が駄目兄貴のために朝早く起きなきゃいけないのよ。寝言は寝てから言って」って言われたんだよ」と綾芽に向かって愚痴を言い、綾芽が「なら私がつってあげるよ、毎日は無理だけどね」と言って作ったのが始まりだった。

そして、作られた弁当は非常にかわいらしいものだった。クラス、いや、学校中の男達が憎悪と羨望のまなざしで犬神を見つめているなか、弁当を食べ終えた犬神の第一声は「量が少ない」だった。綾芽が「ゴメン、でも味はどうだった？」と弁当が完食されていることから、きつといい返事がもらえらると思いいながら聞くと、「まあ、不味くはないよ」と犬神が答え、次回から重箱で大量のおかずとご飯が用意されることになった。

ちなみに犬神はこの後、学校中の男達にボコボコにされ、女子の最低な男ランキングの首位におどりでていた。

「おいしい？ 白夜クン。今日の炒め物とかは、先週のと違って微妙に味を変えてみたりしてみたんだけど」

毎度恒例となった食後の味の批評である。犬神は毎回重箱の弁当と料理を完食はしているのだが、こう聞かれると常にこう答えた。

「普通だね」

その一言に綾芽は少ししょんぼりしながら、重箱を片付け始める。かなり残念で報われない姿だった。いっそ食べられないほど不味ければ彼女は幼馴染のために朝早く起きて弁当を作ろうともしなかったのだろう。犬神をうならせるようなおいしい弁当なら、毎回犬神に「おいしい」と言わせるためにネットでレシピや味付けを調べて頭を悩ませることも無かったのだろう。毎回の如く「不味くはない」、「普通」とだけ返されてそのたびに『二度と作ってやるものか』と綾芽も思っのだが、犬神も用意された重箱の中身は米粒一つ残さず完食しているため、綾芽もがんばって「おいしい」と言われるまで料理を続けようとしているのだった。

「そう言えば、一年のクラスの一人が行方不明になってるって知ってる？」

片付けを終えた後、互いの席に座りながら、綾芽が犬神に向かって問いかける。

「いや、初耳だけど？ どうせ昨日の打ち上げではめをはずしすぎて、どっかお外で居眠りでもしてるんじゃないの？」

「私も噂で聞いたただだからあんまり詳しく知らないんだけど、その子打ち上げの後「忘れ物を取りに学校に行く」って言って友達と別れたあと居場所がつかめないんだって。もしかしたら学校の幽霊かなにかにさらわれたんじゃないかって、みんな言ってるよ」

「オカルトかよ！ あんまり興味ねーよ俺」

この手の話題は常に女子の独壇場だ。女は怖いものが嫌いといいながら結構な確率でホラーが大好きである。知り合いが何人も彼女とホラー映画を見に行つて眠れない夜をすごしていることを犬神は知っていた。

「それより、行方不明になってる奴って、男、女？」

「女の子だけ」

「じゃあ、絶対街で悪い男に引つかかって大人の階段上つただけだよ」

とんだかいだん違いだ。犬神はうんざりしながら机の上に突っ伏した。

午後からの授業も寝て過ごす時間はたっぷりとあるのだから昼休みぐらい起きて話を続ければいいのだが、この男は興味の無いこと以外は基本寝て過ごす。そう考えると、学園祭のときはほぼ不眠不休で働いていたのが嘘のようである。

「ちよつと！ まだ話の途中なのに勝手に寝ないでよ」

「何だよ、まだ何かあるのかよ」

「さっきの日本史の答え合わせしよう」

綾芽はニコニコしながら犬神の方を見ていた。犬神は数学と英語

以外なら割とできるほうだった。

「パス。めんどい」

けれども、犬神は綾芽の提案をぶった切った。犬神の成績なら日本の日本史の問題なら十分に八割の正解を狙えるので、学校でもトップクラスの成績を誇る綾芽と答え合わせをしても十分話にはついていけるはずだった。けれど、肝心の本人のやる気が皆無だった。

「つれないなー！」

口をとんがらせながら綾芽が言う。その言葉を聞いた白夜は少し怒りながら反論する。

「三回に一回ぐらい俺のほうが点がいいならやってもいいけど、今までの人生でお前にテストの点で勝ったことねーじゃん。俺の頭が悪いことの証明をこれ以上積み重ねても意味ないだろ」

「別に勝ち負けはどうでもいいでしょ。大事なのは間違えたところをキチンと理解して次に繋げることだよ」

「たまには勝利という飴を与えてくれないとやる気もおこらねーよ」
そしてそのまま白夜は不貞寝をした。前日徹夜をしていたからというだけでは説明がつかないほど、体が睡眠を求めている。

「もう放課後だよ」

幼少のころよりずっと聞き続け、耳になじんだ綾芽の声が聞こえて白夜は目を覚ました。どうやら昼から放課後までずっと眠っていたらしい。

辺りは夕日に彩られ、全てが赤く色付いていた。

「大丈夫、白夜くん？ 体調悪いの？ ずっと眠り続けてたし」

幼馴染は机に突っ伏している白夜の顔を覗きこみながら話しかけてくる。

「……大丈夫だよ。少し疲れてただけだから」

白夜は眠そうに目をこすって答えるが、同時に不安も覚えた。徹

夜をしたことは何度かあったがこれほどまでの眠気は感じたことが無かった。

「あんまり昼寝しすぎると夜眠れなくなるよ」

「あんまり子供扱いすんなよ。十分眠れるよ。今この場でもう一度眠りたいくらいにな」

幼馴染の忠告を話し半分に流し、白夜は鞆を持って下校の準備を始めた。もうクラスに残っているのは二人のみだった。

外に出て並びながら帰って行くとグラウンドで野球部たちが練習している。白夜達の学校の野球部はそこそこ強いのだが、甲子園に出場できるほどではない。それでも毎日熱心に練習していた。

「がんばってるな、野球部」

「そうだね。私たちも勉強がんばらないとね」

そこまで言うとう綾芽は多少顔を赤くして白夜の方をまっすぐ向いて話しかけた。

「あのさ、今日夜家で一緒に勉強しない？ 白夜クンのわからない問題全部教えてあげるよ」

白夜にとっては願ってもない提案ではあった。二週間後には中間テストが控えてあることを考えれば、今のうちから苦手な科目はつぶしておきたいと考えてはいた。ただ、二日続けて夜家を空けると妹にがみがみと言われる気がしていた白夜は少し悩んだ。

その時、辺りに快音が響き、野球部の練習していた方向からライナー性の打球が一直線に白夜達の方向目がけて飛んできた。

「危ない！」

野球部全員が声をそろえて白夜達の方向へ叫ぶ。その声に反応した白夜は目の端に打球を捕らえた。

（どこが危ないんだ？ 止まって見えるほど遅い打球じゃないか！）
周りの目から見れば非常にスピードに乗った打球だったが、白夜の目にはコマ送りに見えるほどゆっくりとしたスピードでこちらに向かってきていた。だが、肝心の打球に到着地点にいた綾芽は全く反応できていない。白夜もさすがにスピードが遅くても硬球が当たれば痛いだろうと思い、すばやく綾芽の前に回りこみ野球部のスラッガーが放った会心の当たりをいとも簡単に素手で受け取った。
「えっ！」

危ないという声にだけ反応し、体を硬くしていた綾芽は飛んできた打球を素手で受け取った白夜の行動に驚いた。そして続けて彼を心配する声をかける。

「大丈夫！？ 怪我してない！」

彼女に声をかけられた白夜本人は全く持って平気だった。素手で打球を受け取った時点で打球の威力が大したことが無くても相当のダメージがあるはずである。しかし、白夜本人は痛みを全く感じていなかった。そして何事も無かったかのように、受け取った打球を野球部の方へ投げ返した。

「大丈夫、大丈夫。あの程度の打球で怪我なんてしないよ」

なおも心配してくる綾芽に向かって手を見せながら白夜が答える。綾芽も白夜の手を確認するが多少赤くなっている程度で特に腫れている様子も無いことがわかった。

「白夜くんが運動神経いいことは知ってたけど、ここまですごいとは思わなかった」

「別にあのくらいの打球なら誰でも反応できるだろ」
改めて帰路に就き始めた二人は先ほどの出来事について話し始める。

「いや無理だよ、すごい勢いでこっちに向かって来てたよ！ あん

なの驚いて硬くなるしかできないよ」

「それは言いすぎだろ、現に手も赤くならないヒョロ球だったぜ。大したことはなかったんだよ」

「それが不思議なんだよね。どんなに威力が無かったとしても、もつと派手に手が赤くなってもいいと思うんだけど」

「昔悪戯と喧嘩のしすぎで手の皮が厚くなってたんだよ」

そう言っつて一旦この話を切り上げる。もうすぐ綾芽の家の近くである。

「あつ！ 思い出したけど今日どうする、家に来る？ 夕飯だつてご馳走するよ！」

綾芽が髪を振りまきながら振り返り、もう一度少し顔を赤くしながら白夜に提案する。

「ちなみに、夕飯は誰が作るの？」

「私だけど？ だつて今日お父さんもお母さんも仕事でいないし」

最後に行くに従い声が小さくなる綾芽の返答を聞き白夜は即座に結論をだした。

「今日は家に帰るわ。妹も二日連続で夜一人にしたらさびしいだろうし」

白夜は表面上そうは言ったが、綾芽の飯より十倍おいしい妹のご飯を選んだだけであった。これが、綾芽のお母さんが作るのならばきつと白夜はお邪魔していたのだろうに……

「わかった。それじゃあ、白夜くん、ちゃんと勉強しないと駄目だよ。バイバイ」

やや残念そうな顔をしながら綾芽は手を振って自分の家へと帰っていった。

そして白夜は自宅への道を進んで行き、昨日警察とであった場所で足を止めた。

道路には血痕も葉莢も落ちてはいなかった。第一に辺りには住宅が立ち並び、銃声なんてものが響けば騒ぎになるはずである。

「やっぱり夢だったのかな」

そう呟きつつも気が付けば手に汗を握っていた。どうやら体はあの夜の恐怖を本物として認識しているらしい。

「馬鹿らしい」

夢にビビッている自分自身にイラついて、白夜は頭を振りながら自宅へと帰った。

ムーンウォーク

「うまいぞ、マイシスター。やっぱりお前の料理はサイコーだ」
夕飯時になり白夜は、帰宅した妹の料理を手伝って出来上がった料理を食べながら妹をべた褒めしていた。

「お兄ちゃん、鶏肉ばっか食べてないでちゃんと野菜も食べなきゃ駄目だよ」

「うーん、お兄ちゃんピーマン嫌いだけど、いとしのマイシスターのために食べてやるぞ」

そう言っただけで妹の作った鶏肉とピーマンと玉ねぎの炒め物に手を伸ばしピーマンを食べる。

「お兄ちゃん、玉ねぎもちゃんと食べてね」

気が付くと白夜の皿は何故か玉ねぎを無意識によけていた。

「あれ、一緒に食べてたつもりだったんだけどな？」

そう言っただけで玉ねぎを口に運ぼうとするが、何故か体がストップする。

「どうしたのお兄ちゃん？ 別に玉ねぎ苦手じゃなかったよな」

「そうだけど、なんだろう。体が食べるなって命令してるみたいで動かないや……どうなってるんだ!？」

玉ねぎを箸につかんで口の前でストップしている白夜は手が震えており、額からはおびただしいほどの汗が流れていた。段々と顔色も青白くなってきた。

「お兄ちゃん大丈夫!？ 別にそこまでして無理に食べる必要ないよ」

「ゴメン、マイシスター。俺の分も食べておいてくれ。俺はもうご馳走様だ」

そう言っただけで白夜は青白い顔のまま箸をおいて食べ終えていた。飯と味噌汁の茶碗を片付けにいった。

「お兄ちゃん具合悪いの？ お兄ちゃんがお茶碗一杯でご馳走様す

るなんて異常だよ。年金の未納を指摘している議員が実は未納だった時ぐらい異常だよ」

「つまり、良くあることじゃねーか！俺は夜はそんなにいつつもいつつも喰ってないよ、マイシスター」

白夜自身、きつと昼食を過ぎた所為だと納得しながら二階にある自分の部屋へと戻って行った。

ベッドに横たわり天井を眺める。昼間にあれだけ寝たからであるうか、今の白夜は全く眠さを感じなかった。今夜は寝れそうもないなど思いながら、寝返りを打つ。

ふと窓を見ると、夜だというのに非常に明るい光が差し込んでいた。

「そっぴや今日ぐらいが、満月だったっけ」

そう言いながらながらベッドから立ち上がり、窓際へかけより窓を開け放つ。正面には真ん円に輝くお月様が空に腰を下ろしていた。
ドクン！

月を見た瞬間、白夜の中で何かが弾け激しい鼓動に襲われる。
「がっ！」

鼓動と共に体中に痛みとも快感とも取れない奇妙な感覚が駆け巡る。声を出そうとしてもうまく出せない。まるで体が作り変えられるかのように、今までの人生で繋げた神経を一旦ズタズタに切り裂かれ、よりよく繋ぎなおされる感覚。

「があぎやああ！」

叫び呻いた。頭からもう一人の自分がい出てくるかのような痛みが駆け抜け、目から涙を流す。頭を必死に何か打ち付けたくなくなるけれど一行に収まらない痛みにただただ、無意識に暴れまわる。

体の変化に耐え切れず白夜は叫び同時に窓から外へ飛び出した。

どこかへ向かおうとしたわけでは無く、力の限り叫び、魂の赴くまま暴れそうな場所を目指し駆け出しただけだった。

屋根から自分の家の塀へ飛び移る。そしてそのまま道路に降り立

った白夜は叫びながら駆け回る。

周りから見れば狂人の行動ではある。白夜自身どうして走りまわっているのかわかってはいない。けれど、頭ではなく体が、脳ではなく魂が、白夜に対して命令する。暴れ回れと。

走るうちに、もつと疾くしなやかに走る方法を体が探し始める。

白夜は二本足で走るのを止め四本足で地を駆け始める。

次に体を包む服が鬱陶しく感じ始める。それと同時に体が大きく膨らみ始めるのを感じる。体中が毛で覆われ始め本当に人間とは違う生物になっていく。白夜が体の変化を感じてからほんの数秒後、服ははじけとび体が大きく膨張しサッカーボールほどの体格になる。

「ウォーーン！」

白夜は全身を真っ白な毛で覆われた巨大な化け犬と化し、空に輝く月に向かって大きく吠えていた。

白夜はそのまま馬鹿でかい体に似合わない猛スピードでひと気の無い街を全速力で駆ける。新しく得た力を確かめるように。遠くに見えた風景が一瞬で目の前に迫る感覚を味わう。スピードはそこいらの車などでは相手にはなりそうも無かった。

次に白夜は見え始めた廃墟のビルに向かって飛びつく。軽くビルの五階部分まで飛び上がり足をかけると、そのまま一気にビルを駆け上る。一步一步がワープでもしているかと思うほどのスピードが乗りすぐさま廃ビルの屋上までたどり着く。

「ウォーーンーーンーーンーーン！」

もう一度、燦然と輝く満月に向かい大声で吠える。ビルの屋上で吠える姿は、今まで高校生として毎日を送っていた「犬神白夜」では無く、新たに化物として夜の世界に踏み込んだ「人狼」としてのそれだった。

「うるさいわよ、その馬鹿犬。人の縄張りにどかどかと踏み入れ

て大音量で吠えてるんじゃないわよ」

自らの力に酔い我を失っていた白夜は罵声を浴びせられ、ようやくこの廃ビルに先客がいることに気が付いた。

白い狼と化した白夜は声のした方向を振り向く。そこには、金髪を三つ編みにして後ろにながしたかわいらしい少女がいた。少女は現実離れ、いうなれば漫画の世界からやってきたかのように整った顔立ちをしており、つぶらな瞳がとてもかわいいかった。

そんな少女を見た白夜は無意識に一步引いていた。少女がこんな廃ビルにいることに驚いて一步引いたのでは無く、化物の姿をしている今の自分の姿を見ながらも平然と声をかけてきたことに驚いたのでもなかった。

単純に言えば、生き物としての格を一瞬で思い知らされたのである。彼女は何故自分が今まで気付かなかったのか不思議なほど、自らが虫けらと思えるほどのオーラを纏っていた。きつと、人間のままなら、彼女を人間と捉えてそのまま接していたであろう。ア리가獅子を恐れぬように。けれど、今の白夜は化物の世界に踏み込んでいる。目の前にいるどう見ても少女としか思えない存在が自分より遙か高みであることを本能的に悟っていた。

(戦ったら殺される)

すぐさま、その場から自らの保身のために逃げようとする。だが、一步を踏み出そうとした瞬間後ろから死神にささやかれる。

「……まさかその馬鹿犬、このまま逃がしてもらえんと思ってる？ 甘いわよ、さつきあんたがいきなり吠えるから取って置きの一匹だったショートケーキを落としちゃったのよ。万回殺してあげたいところだけど、まあ、千回程度で許してあげるからこっちに来なさい」

その言葉は年相応の甘い声ではあった。けれど決して冗談には聞こえず、白夜はそこから一步も動けなかった。

「どうしたの馬鹿犬、吠えるのやめたらとたんにびびっちゃってるの？ 可愛がってあげるからこっちいらっしやいよ。まあ、来ない

なら私から行くけどね」

そう言って目の前の少女はこちらに無防備に向かってくる。

(やられる前にやってやる)

追い詰められている白夜はある判断を下す。無防備で向かってくる少女に一撃を与えてそのまま一目散に逃げるという作戦である。白夜にも目の前に無防備に向かってくる少女に一撃を浴びせることぐらいはできると思い始めていた。

それは新しく得た力の所為か、それとも冷静になればなるほど目の前のかわいらしい少女が自分がビビルほどの脅威ではないという人間的思考が復活したためかはわからない。けれど、意思は固く固まり始めていた。

「グルルルっ！　ウォーン」

喉を鳴らし一度大きく吠えようと、目前まで近付いていた少女に飛び掛った。

「あらら、少しいじめすぎたかな。まさか飛び掛ってくるとはね。まあいいわ、躰の時間よ。『伏せ！』」

一瞬声の調子が変わりやけに迫力のある声が響いたと思うと、白夜はその声とほぼ同時に地面に叩きつけられた。無論自分の意思とは関係なくである。

「キャウン」

情けない声が響き、地面に叩きつけられた白夜が前を見る。目の前には先ほどと変わらず少女がこちらに歩いてくる。

(何されたんだ！？　彼女は俺に触れてないし、俺も触ってはいない)

目を白黒させながら白夜は少女を見つめた。彼女は年に似合わない慈愛に満ちた表情と、地面に這いつくばっている惨めな生き物を見下す視線を合わせながら白夜に向かって話しかける。

「おびえさせちゃったね。ほら怖くない、怖くない」

彼女は手を出して、白夜の頭の上に持っていく。そして

「なんて言うと思った！？　馬鹿犬！」

思いつきり広げた手のひらを握り閉め、頭を本気で殴ってきた。白夜は凡そ少女の力とは思えない力で殴られ、硬いコンクリートにもう一度叩きつけられる。

「キャン!？」

予想外の一撃に驚き白夜は目の前の少女が自分を許す気がないことを悟る。そして、一撃殴った後もなおも彼女は白夜の頭を殴り続ける。もうすでに白夜の頭は廃墟のビルのコンクリートに沈み始めていた。

(殺される!)

死の恐怖が体を包み、同時に痛みも感じなくなり始める。そして、数十回殴られたあたりで、一旦毛をつかまれ床に埋まっていた頭を強引に上げさせられ、目の前にいる少女と目が合う。見るもまばゆい金色の目だった。

「どう、こんだけやったら少しは反省した? これに懲りたら人里になんか出ずに、さっさと山に帰りなさい。街になんか出たら、日本みたいな国でもハンターが出てくるわよ」

さつきとは違い、諭すような口調で化け犬の白夜に話しかける。

「ぎゅんわんじゃい」

狼の状態となり人の言葉を喋れない白夜は、それでも懸命に謝罪の言葉を吐こうとした。もしこれ以上攻撃されればそれこそ本当に死んでしまう。

「へっ!？」

けれど、白夜の賢明な謝罪を聞いた少女が見せた感情は驚きだった。目の前の化物が人のような言葉を喋ったことに少女は信じられないという風な表情を白夜に向かって見せる。そして、頭をひねりながらもう一度考え込む。やがて、少女は納得したかのようにこちらに向かって話しかける。

「馬鹿犬、これからの質問に正直に答えなさい。まずは喋れるようにしてあげる。『人語を喋れ』」

「わかりました」

さつきまで、全くもって人語を喋れなかった化け犬（正しくは人狼なのだが）はそれまでが嘘のように人語を喋った。

「あっ、俺喋れてる」

「当然よ。私が命令したのだから。それよりも、早速質問よ」

少女はさつきまでの怒りとおふざけを纏った雰囲気と打って変わって、いたって真面目に話しかける。

「ワン」

「返事はハイよ」

「ワンワン」

「ハイは一回って、ハイですらない！……まあいいわ、あなたはいったい何者？ 山犬の類の化け犬じゃないの？」

少女はあきれながらも、白夜に向かって話しかける。

「いや、俺は人間だった。でも今日突然月を見たら知らない間に走り回って気付いたらここに……」

白夜自身言っただけで思いつく。自分は人間だった、今日までは確実に狼の姿になっていた今の今まで全く問題視していなかったが、自分が化物の姿でこの場にいること事態おかしいのだ。

「俺はどうして、なんでここに。どうしてこんな姿に」

白夜は自分の現状を確認すると急に恐ろしくなる。今の自分は化物で、戻れる保障なんてないのだ。

「『落ち着きなさい』まずは現状がわからないとどうにもならないわ」

彼女がまた一瞬声の調子を変えて白夜に命令する。その言葉で白夜はパニックになり始めていた頭が落ち着いていくのを感じた。

「あなたはこれまで、こんな風に化け犬になったことなんてなかったのね？」

「ワン」

「だから、ハイだって……まあいいわ。次の質問、あなたは満月を見て化物の姿になったのね」

「ワン」

「まさか、人狼なのかしら？ この日本じゃ縁がないモンスターの
上にとつくに絶滅していたと考えていたけど」

少女はその幼い顔に似合わず渋い顔つきで悩み始める。

白夜自身彼女の会話に飛び出した「人狼」という言葉に反応する。
狼男として、西洋のモンスターストーリーなんかではよく登場するモ
ンスターの一つである。

「なあ、俺は、元に戻るのか？」

「その問いは、簡単に答えられない。第一、人狼なら人狼に噛まれ
でもしないかぎり突然人狼になるなんて考えにくいし、第二に人狼
は普通半人半狼が普通でしょ？ でも今のあなたは完全に狼の状態
になっている。私も本物の人狼を見ているわけじゃないからはずき
りとは言えないけど、人狼じゃない可能性だつて十分にある」

白夜はどんどん落ち込み始める。もしかしたら今までの生活には
もう戻れないのかもしれない。

「とりあえず月が沈むまでわからないつてのが本音よ。まあそれほ
ど落ち込むこともないわよ。たとえ化物でも私は殺したりしないし」

さつき自分を千回殺すと言つて本当に殴りまくつた奴が言つても
説得力がないと思つた白夜だつた。

「さつきだつて、たまに人里に下りてくる馬鹿な山犬に人里が恐ろ
しいつて事を教えてあげるために、やつただけよ！」

俺がジト目で少女の方を見ていると、少女は怒つて弁明してきた。

「じゃあ俺つて完全にとばっちりじゃん」

「そうね。一応あやまつてあげるから。ドウモスイマセンデシタ」

完全に片言で誠意のせの字も無い謝罪を聞きながら、不安そうな
顔で白夜がもう一度少女に尋ねる。

「俺はどうしたらいいの？」

「そうね、まずは安全な場所に移動して、今日をやり過ごすことを
考えなさい。そのまま人間に戻れたらとりあえずはOK。戻れない
なら、山に永遠に暮らすことになる」

いたつて真剣に彼女が答える。

「安全な場所ってここは安全じゃないの？」

「残念ながら馬鹿が騒ぎすぎたし、私も能力を発動しちゃったしね。いくら日本みたいな国でもここに長居しないほうがいいでしょ。」

彼女はそう答えると自らの履物をきちんと履き直した。そして、白夜に向かって手を差し出してくる。

「まあ、とりあえずはそんなに心配しなくて大丈夫よ。たとえハンターが来ても守ってあげるし。じゃあ、とりあえず自己紹介。私の名前はレイル。カーミラ。あなたは？」

「俺は犬神白夜」

そういつて差し出された手に白夜はチヨコンと自らの獣と化した手を重ねた。端からみたらただのお手だった。

「わかったわ。じゃあ、シロって呼ぶわね」

「ワン。じゃ無くて……やだ！」

白夜は大声でレイルの提案を拒否する。

「そうね、片方が一方的に呼ぶのも駄目よね。よし、シロ私のことは『御主人様』と呼びなさい」

「ワン。御主人様」

白夜は全く意識せずに目の前の少女を御主人様と呼んでいた。

「って、何で俺は御主人様なんて呼んでるんだ！？ そんな気は全く無かったのに」

「ゴメンなさい、シロ。無意識に私の能力が発動していたみたい。まあ能力を解く気はないから早くなれることね」

誤る気など微塵も無い笑いをこちらに向けると、全く悪びれることも無く平然と言い放った。

「それでは夜の世界にようこそ！」

この夜に白夜はレイル。カーミラと出会う。それは深い闇を歩くための光となったのか、深い闇の深淵にいざなわれる畏だったのか

はこの時は誰も知らない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0917x/>

夜の歩き方

2011年9月27日13時27分発行